

### 超多収稲の収量成立について

#### 第2報 アケノホシの収量構成要素 (登熟歩合) の特徴

井手眞一・鍛治原俊夫 (熊本県農業試験場)

Shinichi IDE and Toshio KAJIHIRA : Analysis of Character of High Yielding Rice.

#### 2. Percentage of Ripened Grains of "Akenohoshi"

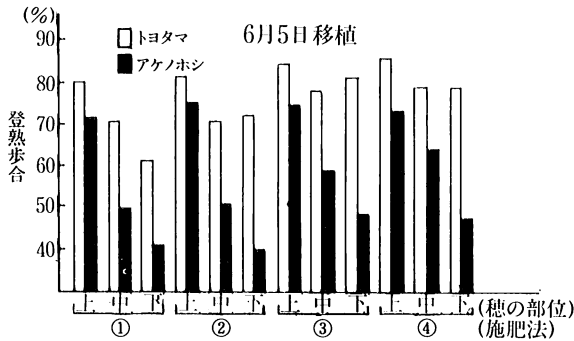
アケノホシは、従来の日本稲に比べ穂数は多くないが1穂粒数が多いため、単位面積当たりの粒数確保は容易である。しかし、登熟歩合が低く、粒数の多い割には多収をあげ得ない場合が多い。そこで、アケノホシの稔実の特徴をみるため、穂の部位別、および枝梗別の登熟歩合を明らかにするとともに、施肥法の違いが稔実に与える影響について検討したので報告する。

##### 1. 試験方法

- 1) 供試品種 アケノホシ・トヨタマ (標)
- 2) 移植期 6月5日・6月19日
- 3) 施肥法 (N成分量kg/10a) ①基肥8+中間追肥0+穗肥4+晩期穂肥2+実肥0 ②8+0+4+4+0 ③8+2+4+2+0 ④8+2+4+2+2
- 4) 栽植密度 22.2株/m<sup>2</sup>
- 5) 穂の区分 上位3本・下位3本・残りを中位とした。

##### 2. 試験結果と考察

6月5日移植ではアケノホシは、m<sup>2</sup>当たり粒数が7万粒と多く全般的に登熟歩合は低かった。穂の部位別でも、トヨタマでは差はみられないが、アケノホシでは上位、中位、下位の順で高かった (第1図)。



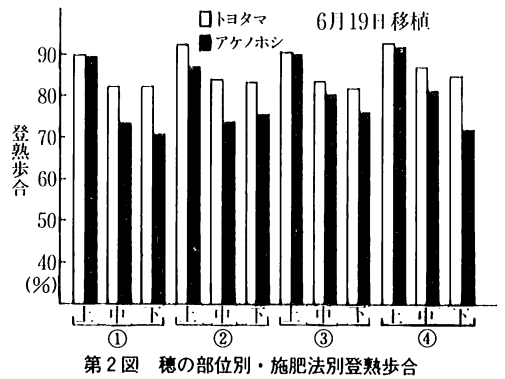
第1図 穂の部位別・施肥法別登熟歩合

6月19日移植では、両品種とも全般的に登熟歩合は高かったが、アケノホシはトヨタマより低かった。穂の部位別では、6月5日移植ほどの差はみられなかった (第2図)。施肥法では、両移植期とも実肥施用区で登熟歩合が高くなる傾向がみられた。

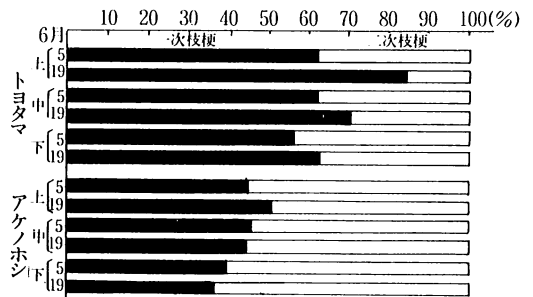
枝梗別穎花数の特徴をみると、アケノホシはトヨタマより1次枝梗着生稈の割合が少なかった。移植期別では、トヨタマは6月19日移植で1次枝梗着生稈の割合が高かったが、アケノホシでは差はみられなかった。また、穂の部位別では、両品種とも上位、中位、下位の順に1次枝梗着生稈の割合が高かった。以上のように、アケノホシは、移植期、施肥法、また粒数の多少にかかわらず1次枝梗着生稈の割合が低かった (第3図)。

枝梗別登熟歩合では、アケノホシは両移植期とも1次枝梗着生稈が2次枝梗着生稈より高く、その差は6月5日移植で顕著であった。トヨタマも同様な傾向であったが、移植期による差は小さかった (第4図)。

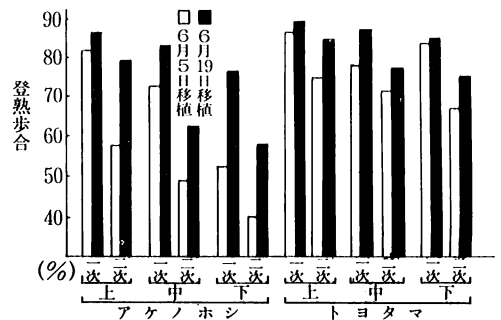
以上のことから、アケノホシの稔実の特徴は、①下位枝梗着生稈ほど登熟歩合が低い。②2次枝梗着生稈の割合が高く、登熟歩合が低い。③移植期早進化による過度の粒数確保は登熟歩合を低下させる。④実肥の施用により登熟歩合が高まる傾向にある。



第2図 穂の部位別・施肥法別登熟歩合



第3図 枝梗別穎花数(各部位全粒数に対する割合)



第4図 枝梗別登熟歩合(④区のみ)